

F/T13
FESTIVAL/TOKYO

ARTS
COUNCIL
TOKYO



東京文化発信
プロジェクト



TOKYO ● 2020

石のような水 /

作：松田正隆

演出・美術：松本雄吉

Water Like Stone /

Text: Masataka Matsuda

Direction, Stage Design: Yukichi Matsumoto

12.5 (Thu) - 12.8 (Sun)

にしすがも創造舎

Nishi-Sugamo Arts Factory



演出ノートI

松本雄吉

1. 「石のような水」—タルコフスキーのいくつかの映画作品から—ある都市にある高層アパート群。かつて、その都市の近郊に隕石が落ちて、巨大な穴ができた。穴の中心から周辺30キロメートル圏内を人々は〈ゾーン〉と呼び、政府はそこを立ち入り禁止区域に指定した。
2. 「石のような水」は、〈ゾーン〉への案内人須藤慎司とその妻今日子、今日子の姉でラジオ局でDJをしている秋子、この3人をとりまく9名の登場人物によって展開するSF作品であり、メロドラマである。
3. この作品のために段丘状の舞台を用意する。段丘状の舞台は、その各部分が公園、須藤の部屋、秋子の放送局、繁華街の交差点、路地、プールサイド、カフェ、港の岸壁、フェリーの甲板、などなど、として設定される。
4. 段丘状の舞台は一望できる、ある都市の地図である。同時にその地図は登場人物たちの相関図である。
5. 段丘状の舞台の背後に〈雲に覆われた空〉を立てる。それは、隕石の落下によってあらわれた〈ゾーン〉の陰鬱な空である。〈ゾーン〉というデストピアの平原に、主人公須藤は〈枯れかけた木〉を植える。そして木に毎日水を遣ることを自らに課す。
6. 〈ゾーン〉というデストピアに魂の解放を感じる須藤。
7. 〈ゾーン〉への案内人という家系、隠れキリシタン、オラシヨ、被差別民。
8. 〈ゾーン〉は遍在する。
9. 段丘状の舞台に〈タテの構図〉の風景をつくる。
10. 段丘状の舞台に〈ヨコの構図〉の風景をつくる。
11. この構図を作るのは、高層ビルの影であること。それはすなわち、不安な構図である。
12. 「石のような水」は全46シーンによって構成される。そのシーン展開はオーバーラップ、パン、フラッシュバックなど、映画を意識した方法をとる。

それは、たっただいま見た風景が、すぐさま過去として記憶され、次に来る時間へと移行する意識の流れの特殊な体験となる。
13. 「石のような水」は会話劇である。まずは、劇中に交わされる日常的な会話のリアルさにこだわること、そして、そのリアルさが超日常となること。
14. 会話するひとのからだのカタチにこだわる。
15. 会話するひとの声、息遣いにこだわる。

松田正隆(劇作家／マレビトの会代表)

森山直人(企画・演劇評論家／京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター)

「穴」の現れるところ

チェルノブイリへの取材の経緯

森山 『石のような水』は、立ち入り禁止区域「ゾーン」への案内人とその家族、そこを訪れる人々の人間模様を描く作品です。これは、福島第一原発の事故後の状況と響き合う内容でもあります。松田さんはかつて『CAMOCEP(サマシヨール)ー長崎そしてチェルノブイリ』というドキュメンタリー作品で、チェルノブイリを訪ね、現地の人々にインタビューをなさっています。この作品が撮られた2006年は、チェルノブイリ事故が起きてからちょうど20年の節目にあたる年であり、『石のような水』で参照された、旧ソ連の映画監督アンドレイ・タルコフスキーの没後20年でもあります。松田さんが「マレビトの会」を立ち上げたのもちょうどこの頃ですし、その後の「ヒロシマーナガサキ」シリーズ(『声紋都市ー父への手紙』、『PARC CITY』、『HIROSHIMA-HAPCHEON:二つの都市をめぐる展覧会』)、そして今回の新作へと繋がる原点がそこにあるのではないのでしょうか。

松田 そうですね、11年に福島の事故があった際、同じようなことを取材した記憶があるなあと、ふと思い出しました。『サマシヨール』を撮ることになったきっかけは、ディレクターの馬場明子さんが映画監督の黒木和雄さんにチェルノブイリのドキュメントを撮りたいと相談して、黒木さんが僕を紹介してくれたことでした。僕自身、原爆をテーマに演劇をやりたいと考えていた時期だったので「行かせてください」と。

この映画では、「ふるさと」というテーマについ

て自分なりに掘り下げて考えたいと思っていました。チェルノブイリには、原発事故によって立ち入り禁止地区となった土地に、自らの意志で暮らしている「サマシヨール」と呼ばれる人たちがいるんです。たとえば、事故で都市機能自体を失った街プリピャチに4歳までいて、その後、強制移住で他の土地に移った若者たちがいる。故郷を捨てた彼らは、記憶のなかに故郷を持っている。ところがサマシヨールのおじいさんたちにとっては、故郷は記憶ではなく現実に存在している。彼らのそうした想いに加え、この作品のなかでは、僕の故郷である長崎の被爆者、片岡津代さんの体験談も入ってきます。その二つの土地を貫くのが、「ふるさとをどう捉えるか」ということ。いわゆる「ふるさと」という言葉に自動的にまわりついてくるノスタルジーに対して抗いたい、という個人的な想いがあったのと同時に、「ふるさと」が異郷になるような瞬間はないだろうか、そんな可能性を探ってみたいかったです。

森山 実際に「ふるさと」の捉え方は、一人ひとり違うと思います。サマシヨールの人たちは、立ち入り禁止区域であろうとそこに住むのは当たり前だと言う。彼らにとって、ふるさとというのは体の一部みたいなもので、当然のものとしてそこにある。一方、4歳で被爆し、プリピャチを離れ、そこを故郷だと言う人たちの感情はとでも揺れている。ドキュメンタリーでは、それぞれに異なる「ふるさと」の認識、身体化のされ方が描かれていましたが、松田さんご自身はそうした状況をどのように受け取りましたか。

松田 はっきりと覚えてはいませんが、そこが汚染

地区だと分かっているながら、避難地域にいとストレスで死んでしまうから、それなら故郷で死ぬ方がいいってという老人たちの言葉が印象的でした。その感覚は分かろうとしても分かるものではない。ただ、話していくうちに顕在化してくる本音もあるのでは？と思い、ひたすらインタビューを続けていました。

むしろ取材時の印象として強烈に覚えているのは、なんていうか、避けようのない空気のようなものにまわりつかれる感覚です。サマシヨールのお宅に行くと、必ずご当地のものをふるまわれるんです。自家製のウオッカやジャガイモなど。いちばん、怖かったのは、キノコの漬け物。「この辺で採れたキノコです。本当に美味しいから食べなさい」って言われたときはちょっと……。でも、食べましたよ。放射能は目には見えないんですけど、放射線量を測ってみると29マイクロシーベルトもあり、びっくりしたことを覚えています。苔の生えている場所や、茂みで測ると数値が上がるんですよ。ただ、その当時は不思議と他人事のように感じていました。

森山 なるほど。とはいえ、取材者として、他人事じゃない人という役割を負わされていたところもあるでしょう。松田さん自身も長崎の出身ですし、原爆が落ちてから20年近く経って生まれている世代ですから、むしろプリピャチの若者たちのほうにシンパシーを感じたのかもしれないけれど。

松田 そうですね、長崎にも被爆の問題はありましたから。長崎に住んでいるというだけで、僕の姉も兄も被爆の有無を調べられたこともあったみたいですよ。そうした被爆差別の記憶は、取材に行く際、頭の片隅にはあったと思います。

森山 とはいえ、長崎の場合は、外国から落とされた「原爆」ですよ。そこでは被爆者と被爆国という立場が比較的結びつきやすい。それに対して原発事故というのは国家的なレベルで言うと自分で自分を傷つけるものです。ドキュメンタリー『サマシヨール』によると、チェルノブイリの場合、キエフ

に「チェルノブイリ通り」やら記念碑やらが建てられていたりしますが、自分で自分を傷つけた国家が、自らの過ちをどのように記憶するのか、という感覚がモニュメントとしてそこに表れている。これはむしろ福島と重なってきます。

松田 確かに、自分たちの起こした出来事の記憶をどうメモリアル化していくか、ということはありませんよね。当時のウクライナは大統領が代わったばかりで、事故について活発に検証する時期だったのだと思います。『サマシヨール』のコーディネイトしてくれた現地の人もチェルノブイリのドキュメンタリーをつくっていたそうです。もちろん、チェルノブイリの位置付けがロシアにしてもウクライナにしてもうまくいっているのかは別として、とにかく向き合おうとしていた。記憶のあり方として。

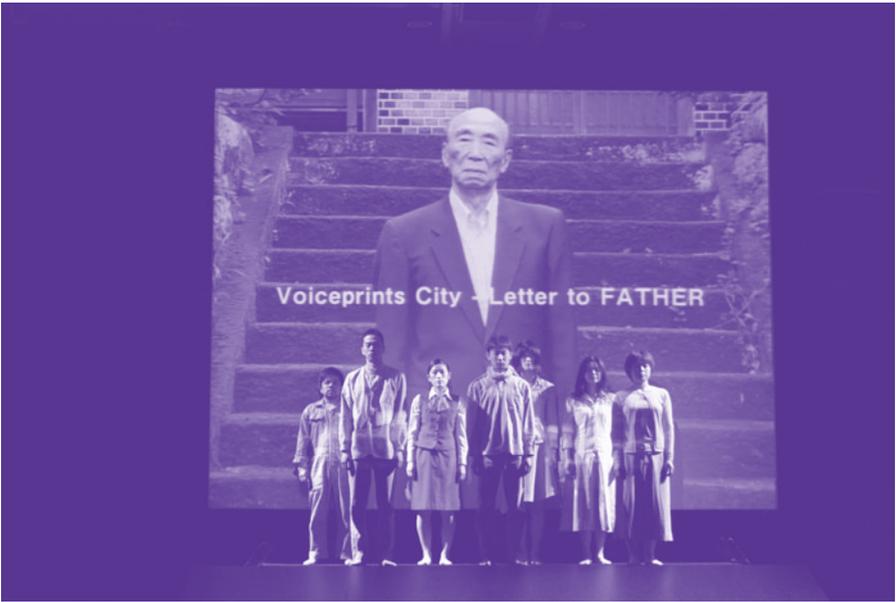
因果律を超えた出来事が起こること

森山 チェルノブイリを訪れた直後にマレビトの会で『アウトダフェ』(06)を発表しましたね。あれは舞台上に巨大な穴があるという芝居でした。

松田 はい、この体験に影響されてつくった作品です。

森山 その後に続く「ヒロシマーナガサキ」シリーズでも、大きな坂が出てきたり、広島市の平和公園がモチーフになったりと、土地と身体を繋げるような装置が使われます。僕は、それらはすべて「穴」のバリエーションなんじゃないかと思っています。またそれは、さきほどお話された「メモリアル化」という問題系にも重なってくる気がします。そして今回の『石のような水』も「SFメロドラマ」と言いつつ、やはり、「メモリアル化」の問題を別の側面から扱っているように思いました。松田さんにとって、これまでの「ヒロシマーナガサキ」シリーズや、マレビトの会でやってきたことと、今回の作品との繋がりとはどのようなものですか。

松田 うーん、どうでしょう。アンドレイ・タルコフスキーの『ストーカー』(1979)という映画がありま



すが、この作品がそもそも今回の『石のような水』の下敷きになっています。とある地域に隕石が落ちて「ゾーン」と呼ばれる立ち入り禁止地区ができたという設定の映画ですね。つまり、私たちにははかり知れない、何か大きな出来事が突然起こる。それは私たちが日々、歯をみがいたり、朝起きて通勤したりする些末な事象とは決定的に違う、因果律を超えた出来事のようなものです。

森山 ええ、突然、何かが起こる。

松田 そうです。その時に人間というのは、自分では捉えがたい深層心理や深い記憶と向き合う羽目になる。夢もそうですが、普段の日常生活とはまったく違う精神構造のアレンジメント（組み合わせ）が生まれてくるはずですよ。

今度の戯曲にはむしろ、そのような心理構造を、空間と時間の関係に置き換えて描きたいという想いを込めました。圧倒的な「ゾーン」が、街の近く、首都の近くに現れる。一方で、日々のたわいのない会話がそこでは交わされている。その時、急に忍び込んでくる「ゾーン」が顕在化させる深層心理と、

日常の相互作用みたいなもので、作品をつくれなかなと思ったんですね。

タルコフスキーの映画では、カメラと一緒にストーリーカーが「ゾーン」に入って行きますが、演劇の場合はなかなか一緒に行くことができないので、ここでは普段の会話の中にふっと「ゾーン」の存在が侵入するという構成になっています。たとえば、ラジオの声と結びついたり、登場人物たちの恋愛に絡んだり。SFなのかメロドラマなのか分からないものにしたかった。上演するのは難しいかもしれませんがね(笑)。

森山 なるほど、確かに戯曲を読んでいて「穴」のバリエーションのようなもの、——今作ではまさに「ゾーン」ですが、それが不意に、身体にある圧力のようなものを及ぼしているの見える瞬間がありました。

たとえば、放射能は数値化することはできても目に見えるものにはならない。そうすると必然的に放射能のような得体の知れないものの存在は、人それぞれ内面で感じ取るしかない。その感覚、日

常に侵入してくる歪みのようなものが、今回のテーマと感じました。ある意味それは、放射能という存在が身近になってしまったわれわれの生活とか恋愛が、どのように変わっていくのかという現実と響き合います。書き上げるまで相当時間がかかったのではないですか？

終わりのないドラマ

松田 ずいぶんかかりました(笑)。物語として書ける気がしなかったので、誰かと誰かの会話が並列している感じで書き進めていきました。いわゆる「葛藤」を演出すればドラマにしやすいと思うのだけれど、それは考えず、どちらかという会話と会話によって起こった出来事を、「しりとりに」のように繋げていく感覚でした。だからある意味、なかなか終わりが見えてこない。

森山 松田さんの戯曲としては、登場人物がいるリアルな会話劇は久しぶりですが、かといって、『海と日傘』や『紙屋悦子の青春』のような、劇団「時空劇場」でお書きになっていた90年代のドラマと今作は異なる。あの頃の作品には終わりがハッキリあったし、終わり方が非常にノスタルジックで、抒情的に際立っていた。それに対して『石のような水』における「ゾーン」は、決して終着点として機能しないものです。

松田 プリビャチという街を見たのは大きかったですね。そこは原子力に携わる人たちの未来都市みたいな街でした。プールもあり、遊戯施設も充実していて、若い技術者もいっぱいいた。高層ビルや

アパートが立ち並ぶ、いわば都市の理想形のような街が、一瞬にして廃墟になってしまった。それがずっと「ゾーン」(立ち入り禁止区域)の中にあって、何がいちばん驚いたかという、自然が繁茂するんだということ。60年間草木は生えないと言われていたのに、すぐ生えてきたらしいのです。映画『ストーカー』の中でも、30キロ圏内の草木の上に寝転ぶシーンがありますが、あの感じ、分からなくもないなあ。それは森山さんがおっしゃる通り、内面で受け止めるしかない「歪み」のようなものなのかもしれません。決してドラマの終着点になるものではない、はかり知れない何かなのです。

森山 確かに、行ってみたいと分からないものはありますね。最近、批評家の東浩紀さんが「チェルノブイリはまったくの無人の場所のように思われているけれど、実際はものすごく大勢の人が日常的に働いていて、それは行かないと絶対分からなかった」と言っていましたから。今作には、そうした、松田さん自身の貴重な体験が深く反映されていると思います。また、そこにはチェルノブイリのみならず、福島事故を受けたわれわれの日常生活が二重映しになっている。松田さんにとっては久方ぶりの長編戯曲で、近年のマレイトの会の反リアリズム/非リアリズム演劇とも異なった、ドラマ演劇の新たな局面が見出されることを期待しています。

(2013年10月19日

『CAMOCE』(サマジョール)―長崎そしてチェルノブイリ

上映後のトークを抄録

元・立誠小学校特設シアター[京都市]にて／

構成：影山裕樹)

作: 松田正隆
演出・美術: 松本雄吉
参照作品: 『スーカー』、『惑星ソラリス』等 (いずれもアンドレイ・タルコフスキの映画作品)

出演: 山中 崇、古部房子、武田 暁、
小坂浩之、酒井和哉、筒井 潤、西山真来、幡司健太、増田美佳、森 正吏、
山口恵子、和田華子

照明: 吉本有輝子
音響・音楽: 荒木優光、佐藤武紀
衣裳: 清川敦子 (atm)
舞台監督: 大田和司
舞台監督助手: 浜村修司
美術制作: 柴田隆弘
演出部: 柏木準人、相澤伶美、境野香穂里、吉本博子
宣伝美術: 塚原悠也 (contact Gonzo)
デザイン協力: 西村
空撮協力: 小川航空
ピアノ指導: 工藤宗子
制作: 川原美保
制作・広報: 土屋和歌子
制作助手: 山崎佳奈子
企画立案: 松田正隆、森山直人 (京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター)
制作協力: 維新派、マレBITOの会、torindo、丸井重樹
制作支援: 京都芸術センター
製作: 京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター

F/Tスタッフ
制作統括: 武田知也
制作: 小森あや
制作アシスタント: 十万里紀子
フロント運営: 西村和晃
プログラム・ディレクター: 相馬千秋

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP):
乾 亜沙美、植村 真、川又美槻、興水すみれ、菅井新菜、塚田佳都、野口 彩、
的場久美、三浦彩歌、山崎 優、山本美幸、吉田由貴

共同製作・主催: フェスティバルトーキョー

Text: Masataka Matsuda
Direction, Stage Design: Yukichi Matsumoto
Inspired by Andrei Tarkovsky's "Stalker", "Solaris"

Cast: Takashi Yamanaka, Fusako Urabe, Aki Takeda,
Hiroyuki Kozaka, Kazuya Sakai, Jun Tsutsui, Maki Nishiyama,
Kenta Hatatsukasa, Mika Masuda, Masashi Mori, Keiko Yamaguchi,
Hanako Wada

Lighting: Yukiko Yoshimoto
Sound, Music: Masamitsu Araki, Takenori Sato
Costumes: Atsuko Kiyokawa (atm)
Stage Manager: Kazushi Ota
Stage Manager Assistant: Shuji Hamamura
Design Production: Takahiro Shibata
Stage Assistant: Hayato Kashiwagi, Remi Aizawa,
Kahori Sakaino, Hiroko Yoshimoto
Publicity Design: Yuya Tsukahara (contact Gonzo)
Design Support: Nishimura
Aerial Photography: Ogawa Air Inc.
Piano Coach: Motoko Kudo
Production Co-ordination: Miho Kawahara, Wakako Tsuchiya
PR: Wakako Tsuchiya
Production Co-ordination Assistant: Kanako Yamasaki
Planning: Masataka Matsuda, Naoto Moriyama (Kyoto Performing Arts Center, Kyoto University of Art and Design)
Production Co-operation: Ishinha, marebito theater company, torindo, Shigeki Marui
Production Support: Kyoto Art Center
Produced by Kyoto Performing Arts Center, Kyoto University of Arts and Design

F/T Staff
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordination: Aya Komori
Assistant Production Co-ordination: Akiko Juman
Front of House: Kazuaki Nishimura
Program Director: Chiaki Soma

Youth Arts Management Program (YAMP):
Asami Inui, Makoto Uemura, Miki Kawamata, Sumire Koshimizu,
Niina Sugai, Keito Tsukada, Aya Noguchi, Kumi Matoba, Ayaka Miura,
Yu Yamazaki, Miyuki Yamamoto, Yuki Yoshida

Co-produced and presented by Festival/Tokyo

今後の活動予定

◎松本雄吉

2014年2月21日 (金)~23日 (日) 「KOBEO-Asia Contemporary Dance Festival #3」 Art Theater dB KOBEO

演出: 松本雄吉 共同制作: ジェン・グエン=ハツシバ、垣尾優 ▶<http://www.db-dancebox.org/>

2014年6月11日 (水)~29日 (日) 「十九歳のジェイコブ」 新国立劇場 小劇場

演出: 松本雄吉 原作: 中上健次 脚本: 松井 周 出演: 石田卓也 松下洗平 ▶<http://www.nntt.jac.go.jp/>

◎松田正隆

マレBITOの会にて、ドラマの可能性を再検討することを課題とし、新作発表に向けた実験作品を制作している。2014年は3月と8月に試演会を予定。

▶<http://www.marebito.org/>

◎京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター製作・主催公演

2014年3月22日 (土)、23日 (日) 春秋座サバイバース『レジェンド・オブ・LIVE』

構成・演出・美術: 杉原邦生

2014年3月29日 (土)、30日 (日) 『葵上／二重の影』 京都芸術劇場 春秋座

構成・演出: 渡邊守章 映像・美術: 高谷史郎 ▶<http://www.k-pac.org/>

フェスティバル/トーキョー組織委員

天児牛大	振付家、演出家
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長
樋川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社社会堂 名誉会長 (50音順)

フェスティバル/トーキョー実行委員会

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末弘昌	豊島区文化工部局長
委員	八巻規子	豊島区文化工部局文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井和幸	北澤尚登 (骨董通り法律事務所)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局次長	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、 桐山由香、高橋マミ、戸田史子

公募プログラムコーディネート

メディア戦略・広報	小山ひとみ
メディア戦略・広報アシスタント	松本花音
オープン・プログラム	北沢聡子、田村かのこ
オープン・プログラムアシスタント	藤井さゆり
票券	田野入涼子、後藤天
票券アシスタント	長原理江
チケットセンター	常澤淳、伊指敏
総務	佐々木由美子、佐藤久美子
経理	葦原円花、一色壽好
	堤久美子、青木亮子

技術監督

技術監督アシスタント	寅川英司
照明コーディネーター	河野千鶴
音響コーディネーター	佐々木真真子 (株式会社ファクター) 相川晶 (有限会社サウンドワークス)

アートディレクション+デザイン

ウェブサイト	アジール (佐藤直樹+中澤耕平+菊地昌隆)
パブリシティ	濱田真一+北島謙子+重松佑介 (株式会社フロフトワーク)
海外広報・翻訳	平昌子、望月章宏
物販	アンドリュース・ウィリアム
編集・執筆	渡辺淳 鈴木理映子

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会

東京都・豊島区・アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場 (公益財団法人東京歴史文化財団)・公益財団法人としま未来文化財団・NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂、ブルームバーグ エル・ピー
助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

後援：外務省、公益社団法人日本芸術家連盟団体協議会
特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東京鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、チャコット株式会社
協力：東京商工会議所豊島支店、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋イベント推進協力会、池袋ホテル会
メディアパートナー：ART IT、J-WAVE 81.3 FM、新潟、CINRA.NET、美術手帖
ホテル/パートナー：サンシャインシティプリンスホテル、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、サウラホテル池袋
地域パートナー：池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファール池袋まちづくり
宣伝協力：株式会社ホステス・ハウス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート (公募プログラム)
会場協力：アサヒ・アートスクエア (公募プログラム)
認定：公益社団法人企業メセナ協議会

平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

【会期】平成25年11月9日(土)～12月8日(日)

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)：石井菜保子、伊集院萌、伊藤安那、伊藤羊子、稲垣美実、乾壺沙美、今井美希、榎村真、大田 久、緒方真由、紙 弘香、川又美樹、栗田知宏、奥水すみれ、崔 瀟、作原飛鳥、佐藤成行、澤田 隆、清水裕花、菅井新菜、田中ゆかり、菅川仁美、塚田佳都、野口 彩、平沢花鈴、嵯 朝美、嶋久美、三浦彩歌、水野美奈、守山真利恵、山崎 倫、山本美幸、吉田恭大、吉田由貴

F/T/ML：青木奈々絵、青木由香、青柳佳代子、阿原乃里子、別荘真由子、館森明香、五十嵐結子、石川世梨、石川拓夫、堀又義雄、今泉友来、岩城春寿、大原尚子、大嶋純子、大津佑子、大村真央、大和田真未、岡本静華、小野寺あす子、小野菜津美、鐘味佳代、片桐根子、加藤真帆、加藤佑麻、金子環美、川島佳子、桐谷佳美、工藤芽咲、桑島剛史、鷲宮衣子、小平怜奈、五藤 真、後藤真哉、小林淳平、齋藤 利央子、崎濱聖哉、佐藤裕香、佐藤直子、染田 光、清水裕加里、常島楓子、杉崎由佳、鈴木明子、鈴木明子、岡島悠生、平里梨香、平 七海、平高信隆、高橋 類、高松童子、蓮川向子、竹之内さやか、竹之内麻子、田中佑、手塚 哲、寺元奈津美、照沼諒香、戸塚 碧、藤田知子、ドラクサンズ、中村直樹、中村光子、中村優子、中野野斗、西本健吾、平松里子、広田 牧、藤田 輝、藤林まきら〜、ブリット、コナー、古庄美和、堀越時芽子、溝口 凜、村川莉子、村田陽亮、百瀬美帆、矢田沙和子、山口侑紀、山科有良、米谷今日子、四方田純子、和田幸子、渡邊早紀 ほか

発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL:03-5961-5202 <http://festival-tokyo.jp/>
編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYL)、小林 剛
※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。

Festival/Tokyo Organization Committee

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hiroshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuohara	Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.

Festival/Tokyo Executive Committee

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimaru, Arts Network Japan Director
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshizue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members:
Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masako Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuake, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Executive Committee Office

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasuake
Vice Administrative Director: Hirotomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators:
Chika Kawai, Oriie Kyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Mami Takahashi, Fumiko Toda
Emerging Artists Program Co-ordination: Hitomi Oyama
Media Strategy: Kanon Matsumoto
Media Strategy Assistants: Satoko Kitazawa, Kanako Tamura
Open Program: Sayuri Fujii
Open Program Assistants: Suzuki Tanoiri, Takashi Ogo
Ticket Administration: Rie Nagahara
Ticket Administration Assistants: Nagisa Sugahara, Jyomyong Yoon
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Ishishi
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Ryoko Aoki

Technical Director: Eiji Torakawa
Assistant Technical Director: Chizuru Kuno
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction + Design: Asy! (Naoki Sato + Kohel Nakazawa + Masataka Kikuchi)

Website: Shinichi Hamada + Satoko Kitajima + Yu Shigematsu (offwork Inc.)
Public Relations: Masako Arita, Akhiro Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Arts Council Tokyo & Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Association for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Bloomberg L.P.

Supported by Asahi Group Arts Foundation

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEDANKYO

Special co-operation from SEIBU IBEKUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IBEKUKURO,

TOBU RAILWAY CO., Ltd., Sunshine City Corporation, Caccott Co., Ltd.

In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Inbound Association, Ikebukuro Hotel Association
Media Partners: ART IT, J-WAVE 81.3 FM, SHINKO, CINRA.NET, Bljitsu Tacho
Hotel Partners: Sunshine City Prince Hotel, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Sakura Hotel Ikebukuro

Regional Partners: Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr

PR Support: Poster Har's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)

Venue Co-operation: Asahi Art Square (F/T Emerging Artists Program)

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013